

黒船情報 北上す

—幕末のマスコミ事情—

川崎高校 白川重敏

一 はじめに

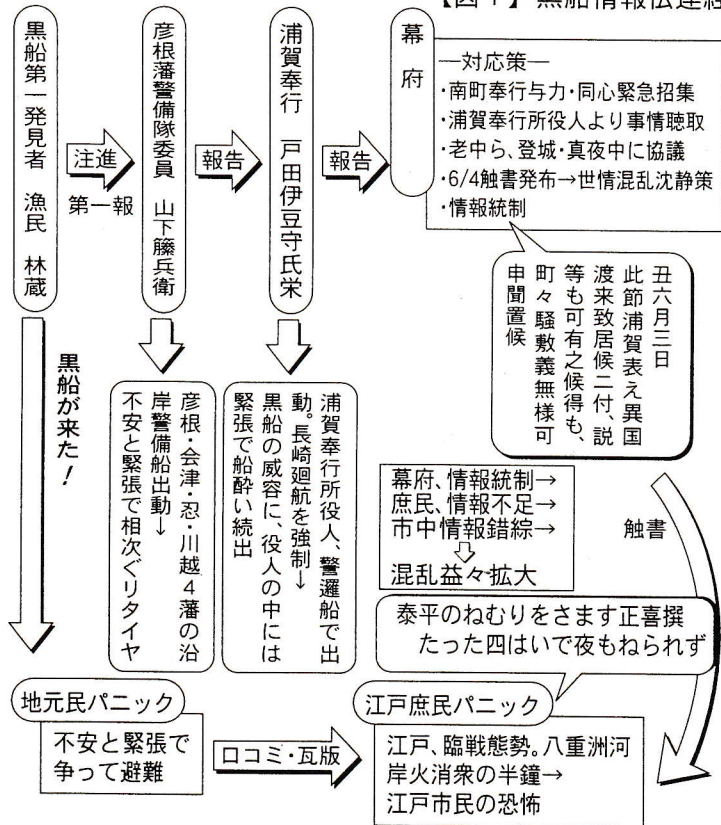
嘉永六年（一八五三）六月三日に、アメリカ合衆国海軍東インド艦隊司令長官マシュー・ペリーが当時世界最強の蒸気船サスケハナ号を旗艦とした四隻の軍艦を率いて浦賀に来航し、開国を要求してきたことは、当時の日本としては一大事な事件として報道された。この突然の来航に江戸中が騒然とし、逃げ出す人もあれば、ひと目見ようという人々もいて、幕府の禁令そっちのけで浦賀に集まり、見物船なる珍商売も登場するほど、衝撃的な出来事であった。この出来事について幕府上層部は、すでに一年前からオランダからの情報によりペリー来航を予想していたが、危機管理意識の欠如からかこれといった対策を立てずにこの日を迎えたので、庶民同様にパニックとなるのである。



ペリー提督

さて、当時のあわてぶりは、「泰平（大平）のねむりをさます正喜撰（上喜撰） たった四はいで夜もねられず（眠れず）」という狂歌にも表れている。ところで、庶民からすれば、上よ下よの大騒ぎとなりながら、その実しつかりご当地浦賀の様子、その正確性はともかくとし

【図1】黒船情報伝達経路



ながら伝えられていた。中には今で言う軍事機密までが、なんと本県北部の津久井郡城山町にまで伝えられていたのである。そこで本稿では、幕府の嚴重なる情報管理の中に置かれた黒船情報が、本県北部の津久井郡城山町に伝えられていたことを紹介し、当時のマスコミ事情を探ってみることにする。

二 ペリー来航 その時江戸は大騒ぎ

(一) 黒船情報伝達経路

江戸の町を震撼させた黒船情報は、図1のように、現場から二と

おりの経路で江戸に伝えられている。一つは現場（第一発見者）から彦根藩警備隊員を通して浦賀奉行、そして幕府への、いわゆる役人コース。もう一つは第一発見者が自分の村で報告し、口コミで広がっていったパターンである。

浦賀奉行からの報告では、初期折衝のためサスケハナ号に乗り込んだ浦賀奉行月番与力・中島三郎助と合原猪三郎からペリーの副官と通訳を交えて対応したことなど、かなり細かいことが報告され、それを幕府（南町奉行所）に伝えている。南町奉行所は非番の与力・同心まで緊急招集し、浦賀奉行所役人から事情聴取し、幕府はその報告をもとに夜中に非常招集をかけ、老中阿部正弘以下諸役人が登城し、協議している。この間江戸湾での初期対応・報告書作成からすでに五時間ぐらい経っている。このような様子を時の南町奉行与力佐久間長敬は『嘉永日記』（日比谷図書館蔵）に

「……（前略）……非番の与力同心残らず出勤す……（中略）：

：アメリカの軍艦浦賀の沖合いに乗り込みしが、これは未だ見たこともなき蒸気仕掛の軍艦にて、其進退極めて自由、大小四隻先着し、跡船の来を待ち合わせて直に江戸海に乗り入れるもの数艘来たれり……（後略）……」と記録している。この段階ではすでに「蒸気仕掛の軍艦」と見破っている。蒸気船とはどのようなものなのか知識があったようだ。今回のペリー艦隊は後にも先にも四隻だけだが、当番与力の情報では続々と黒船が押し寄せてくるような雰囲気である。またさらに続けて「……今にも戦争の始まるは必定にて、ツマリ江戸海へ乗り入れる異国船をその俣逃す筈なければ、之を打ち払うに御固の人数不足ゆえ加勢を要し、御固の四家にては加勢の人数繰り出すために大騒ぎをなしえると也……」と、危機感に満ちた状

況であることが分かる。

一方江戸へ伝わった庶民の情報はもっと早く、数時間後には江戸庶民はパニックになっていた。中には家財道具を持ち出して江戸を避難する者も現れた。

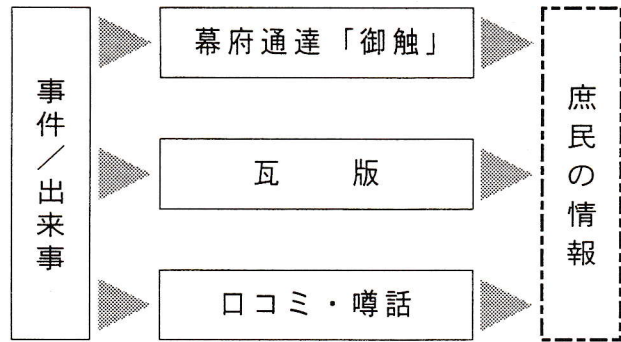
『続々泰平年表』（『東京市史稿』港湾篇第2）によると、

「……かくて浦賀その外、諸処の陣屋より昼夜を分たず、注進の汗馬、並びに海陸の飛脚往来、櫛の歯を挽くよりも忙しく、江戸の大都繁華の巷も、にわかには修羅のあまたに変じ、万の武器調度を持ち運び、市中古着あきなふ店には、陣羽織、小袴、裁付（たっつけ）等をかけならべ、下駄、傘をひさぐ家には、一時に蓑笠を商い、又鍛冶を業とするものは、家毎に甲冑を鍛（きた）ひ、武器あきなふ店には、古き物具をかさね、其の価平日に百倍せり。且つ海辺に屋敷あるものは、老幼婦女その処を立ち退き、家財雑具を持ち運び、さしも広き大江戸も、錘（きり）を立つべき処もなく、奔走狼狽して、往来実に混雑したり……」。と書かれている。普段使っていない甲冑が「其の価平日に百倍せり」は大袈裟だと思いが、急な需要があったことは分かる。古いものもあったようだが、まずは機能より体裁であろうか。

江戸の町はてんやわんやの状態であったことが良く分かるが、したたかな人たちもいたようである。前述の『続々泰平年表』はさらに

「……江戸市内で景氣づいたるは、馬具師、具足師、刀とぎ、人夫宿、左官は土蔵の目塗りに忙しく、駕籠かきは雇いあげで思いうけぬ銭もうけ。立ち退き先にあたる農家の部屋代日増しにせりあげ、食糧の価格はあがる一方、質屋には入質あつて出質なく、見世

【図2】江戸時代、庶民の情報源



先を火事具、陣羽織をもって飾る。閑となった芝居、料理茶屋、遊廓……。と記述してある。黒船来航の経済効果がここに見られる。武器を商う人たちには、思ってもみなかった在庫整理ができたようである。

庶民の情報は口コミで伝わっているため正確性はなく、何倍にもふくれあがって伝わっているの
で、なおさら江戸市民を恐怖に陥らせた。当時庶民の情報源といったら幕府からの通達（御触書）と口コミ・うわさ話、そしてその中間としての瓦版からの情報しかなかった。特に瓦版は、今で言えば号外のようなものであった。そのため速報として庶民の間に流れるが、正確性がないため逆にパニックを引き起こすことが多々あった。次のような庶民のパニックを表現した川柳が残されている。

三味線をひかずに江戸はからさわぎ
よく来たなアメリカ様とソツと言ひ
武器馬具師アメリカさまとソツと言ひ

この黒船騒動で一番儲けたのが武器商人だったようで、『続々泰平年表』は

「とやかくするうちに、一日一日と打過ぎて、はや少しは事慣れ、中には異船見物として、神奈川辺まで遊山がてらに行くもありて、

実に御膝元の御武徳と人々挙げて賞しける内、異船一とまづ退帆の御触れにて一同安心の枕に付きにけり。ただ此の度の仕合せは武器あきのふ物にこそあれ。」とまとめている。

江戸の町の様子を知る史料として、越前藩医坪井信良の書簡がある。それにも次のように書かれている。

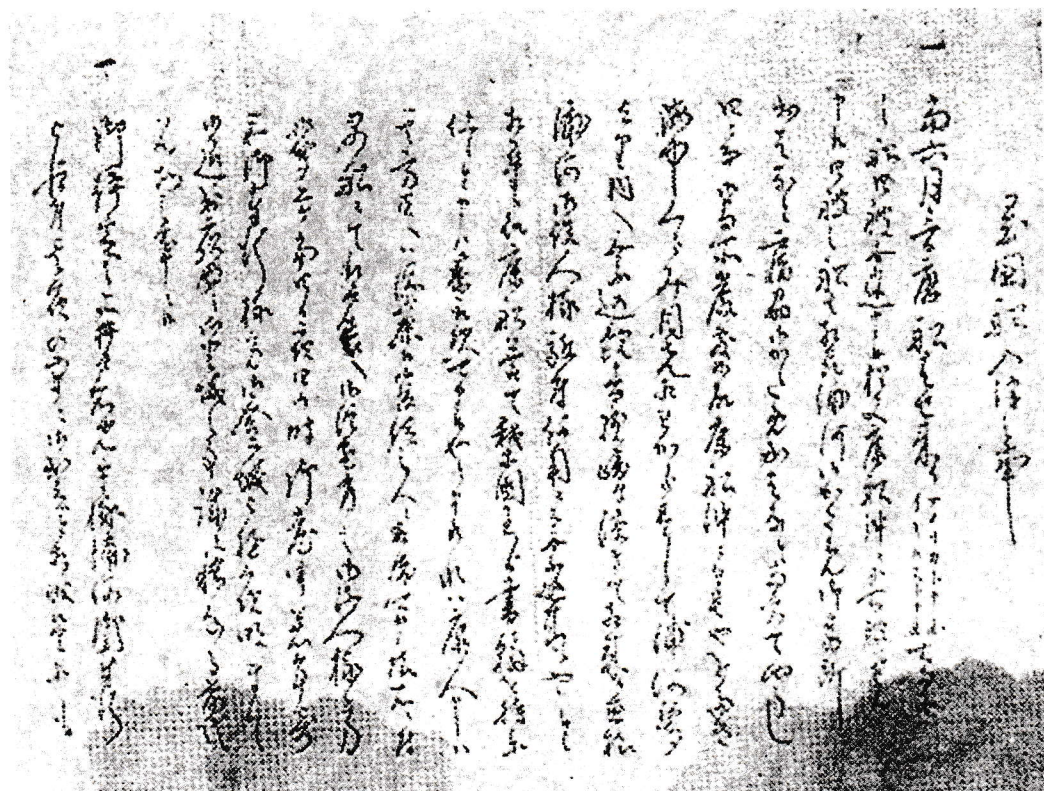
「……勿論武器商売、米屋などの外は皆々商売を休み、武家の一々門の出入り六ヶ敷、一人も緊要の外は出門成らざる位の事故、十二日十三日の頃は小子も廻勤しながら日本橋辺を通行するに、荷を負う者一人もこれ無く、魚舟一艘もなく、武士一人も逢わず、両側共皆々商売休み居。……」

江戸の町は「奔走狼狽して、往来実に混雑したり、」（『続々泰平年表』）という状況から一転、静かになったようである。そして異船見物として神奈川辺まで遊山に行く余裕が出たようだ。米国大統領の書簡を受け取ったことにより、まずは当面の危機が去った安心感が広く行き渡ったのであろう。

三 瓦版から見た黒船情報

横浜の開港資料館には、当時の様子を伝えた瓦版が多数残されている。この瓦版こそ当時のマスコミによるニュース速報であった。しかしその内容たるや鬼のようなペリーの顔や、天狗の顔に描かれたペリーがいたり、黒船にしても外輪が三つもあったり、オランダ帆船に外輪を付けたりと、でたらめな記事が多かった。それでもこうして江戸庶民は瓦版と口コミというマスメディアによって情報を得ていたのであるが、江戸から十三里（約五十三km）も離れた津久井郡城山町でも黒船情報はしっかり伝わっていたのである。

史料1は、黒船情報の瓦版としては最初のものである。今で言う「号外」である。「異国の船、アメリカと申す国、イギリスと申す国の船が四隻やって来た。しかし沖の方にはまだ二百隻もいる。唐船

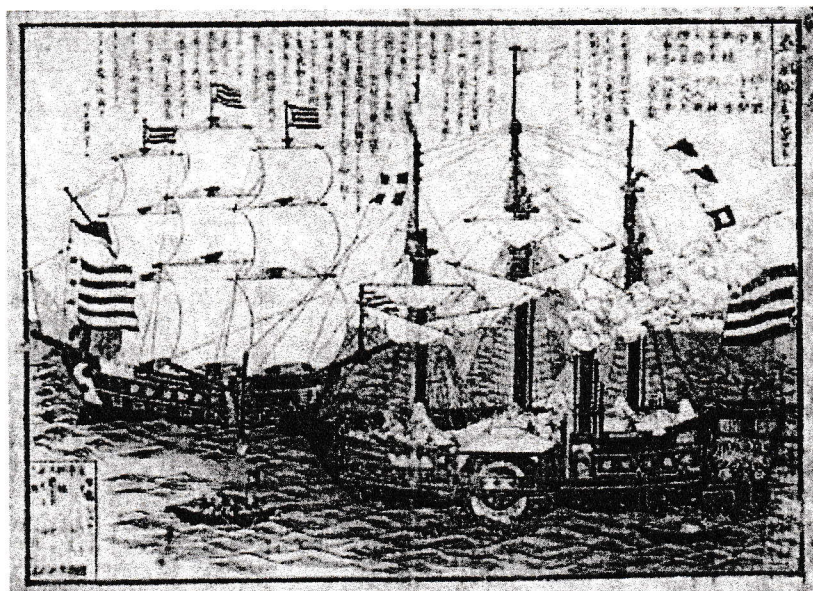


黒船がやって来たことを知らせる瓦版第1報（中山栄之輔氏蔵）
 【史料1】黒船情報の瓦版第1報（NHK『歴史への招待』15より転載）

は沖でもやを焚いて乗り込んできた。また海上で国書の提出を巡りもめたこと。あるいは江戸に早船で注進におよんだこと」などだいたいの内容を把握している。

ペリーが来航してから、江戸では瓦版が、先に出た瓦版を改変しつつ次々と売り出された。その内容は、来航した船、人物、その国の言葉に関するものがほとんどであった。

ペリー来航の際の瓦版の中で、船は最も主要なモチーフで描かれた。その中心は蒸気船であった。一回目の来航直後の船図は、長崎



【史料2】蒸気船フレガットの瓦版

絵に描かれた帆船を写したものであった。中には帆船に大きな煙突や外輪が描かれ、船腹片側に外輪が三つも描かれたものもあった。しかし二度目の来航後はかなり正確な情報を伝えている。

【史料2】は蒸気船フレガットの瓦版であるが、左となりの

帆船と対比させて、帆をたたんだままでも風上に向かって航行できる様子が描かれ、蒸気船について風に関係なく早く航行できる船と認識されていたことがわかる。次のページの図〔史料3〕はペリーの再来に対し、江戸湾警固した諸大名の配置図「御固」の瓦版である。実際の大きさはA3の大きさだが、これこそ軍事秘密であろうが、どの大名がどこに配置されているのかよくわかる。またどこで調べたのか、前掲の【史料2】のように、ペリー艦隊の規模や軍備等も記載されているのだから、マスコミの情報収集能力に驚かされる。

四 黒船情報 北上す

ペリーは六月九日、久里浜（横須賀市）に作られた応接所で国書受理の儀式が終わると、九日十日にかけて、艦隊を品川・川崎・神奈川の町が眺められるところまで移動させたものだから、江戸市中は大パニックに陥り、庶民生活に大なり小なり影響を与えた。それは江戸周辺の天領においても同様であった。

(一) 北上した黒船情報

黒船情報が村々に伝わるのは早かった。幕府はペリー来航後、諸藩に江戸湾の警固を分担させ〔史料3〕参照、その後旗本にも同様な通達を出した。そこで旗本は知行所の村役人を江戸へ招集し、国家・お家の一大事であること、江戸湾の海防警固を仰せつけられたこと、そのために軍資金が必要なことなどを告げ、村の者にも状況を説明し、軍役の準備をするように言い渡した。村役人はこの情報を受け村人へ説明した、というのが恐らく黒船情報が伝わった一般的なルートであろう。例えば武蔵国多摩郡小野路村（町田市）の

旗本山口氏は、六月十日の朝に、領地の農民に軍役の準備をするよう申し伝えていた。それを受けて村役人は準備を整えておく旨、請け書を提出している。黒船が来た七日後には知行地に臨戦態勢の指しが出ていたのだから、これはかなり早い情報伝達であろう。また八月十八日には旗本長沢氏用人中嶋玄之進が愛甲郡飯山村（厚木市）の名主をはじめ、多摩郡寺田町・檜原村・下老分方村（以上八王子市）の名主・名主見習いに対し、格に任命し、村役人にも帯刀させて動員を命じている。こうして多摩や相模の村々に、領主の旗本を通してかなり早い段階から黒船情報が伝わっていたことがわかる。その情報は少なからず生活に影響を及ぼしたのである。

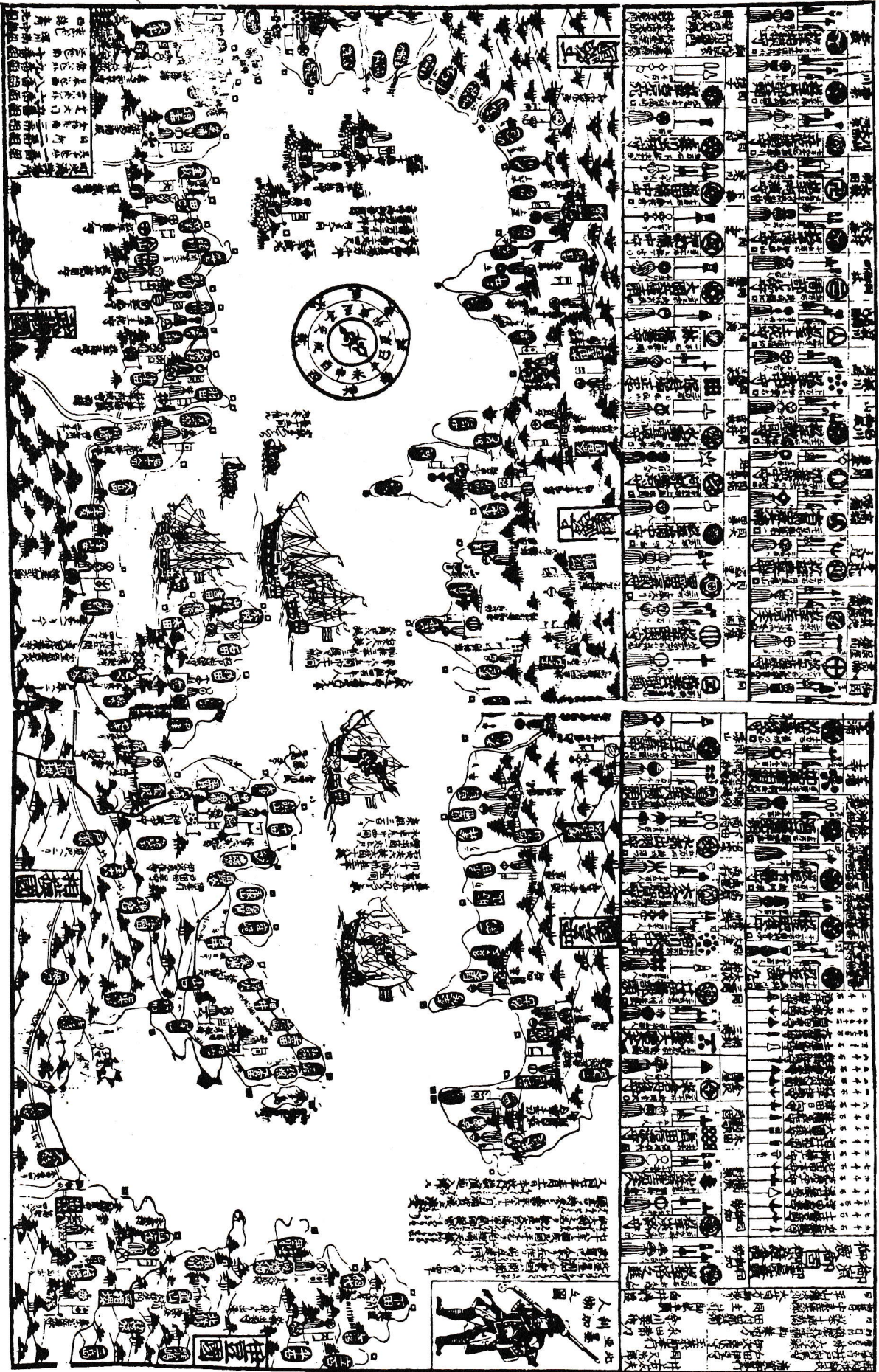
多摩郡鎌水村（八王子市）。ここは幕府の「御林」を管理していた代官・旗本支配の天領だが、ペリー来航後、幕府は江戸湾に台場建設をはじめた。その用材の一部が、この鎌水村の「御林」から伐り出され、整えられて、近隣の五〇あまりの村々の助郷人足を動員して、相模川まで運ばれ、川と海を利用して品川沖の台場まで送られたのである。黒船来航の衝撃が生活に直接かわりをもった一例である。

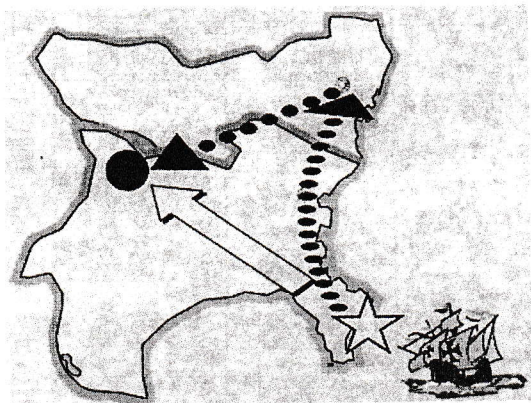
(二) 津久井に届いた黒船情報

現在津久井郡城山町に上川尻村の名主八木兵助ひょうすけの残した『アメリカ船渡来ニ付浦賀表書留』がある。

これはペリー来航後三カ月たった九月の日付のもので、この記録には四隻の黒船の概要、久里浜におけるアメリカ国書の受領の様子とその後の艦隊の行動、奉行所から老中への報告、異国船渡来につき祈祷依頼などがある。

【史料3】『御固』嘉永七年一月の図





【図3】津久井への情報ルート

まず来航した艦隊については「北亜墨利加の内共和政治ワシントンと申す都府の軍也」と明記しており、その外に来航時の様子・艦船の種類・規模・形態・乗員の階級・役割・人数・下士官以上の乗員の名前・武器（火器）の種類・日米双方のプレゼン内容・幕府対応役人名・浦賀奉行戸田伊豆守氏栄から老中阿部正弘への書類内容、嘉永六年六月三日の様子を記録した浦賀奉行所田中廉太郎の報告書など、浦賀でただ見学しただけでは分からないような、軍事的な極秘内容が記録されているのである。

兵助がどのようなルートでこの情報を書き留めることができたかは不明であるが、前述した他の旗本領と同様に領主藤沢氏（藤沢次謙 一五〇〇石）から伝わったと推察される。つまりこの時期経済力をなくして村役人に家政の改革をも任せなければならぬ時に、幕府から江戸湾警固と臨戦態勢を命じられた旗本が、幕府から得た極秘情報を、或る意味の報酬としてリークして御用金や武具・

馬具の調達などを無心し、見返りに村役人の身分保障をするということをしていただろうか。

安政五年（一八五八）一月、兵助は藤沢家より代官割元格・知行所取締役に任命されている。

それにしても当時の村民にこの内容がどの程度伝えられていたかは定かでないが、嘉

永六年十月に小倉村・葉山村（以上城山町）・太井村・三井村・中野村・青野原村（以上津久井町）より江川太郎左右衛門英龍へ江戸防衛のために献納金願いが出されていることから、少なくとも津久井の人々にとって、黒船情報は国防という観点から理解していたようである。

五 おわりに―幕末のマスメディア―

当時黒船が来たということ、幕府は厳重な報道規制を行っていた。にもかかわらず重要情報は漏れていた。兵助の残した覚書は関係者でないと分からない内部機密である。ただ多くの瓦版の黒船情報は誇張されて不正確なものであった。この辺が現在の週刊誌の記事に似ているところがある。だが確実に村人の生活に影響を与えた。

嘉永七年一月十六日、ペリーが再来し、各旗本には湾岸警備が申し渡された。その時の江戸湾の様子はすぐに上川尻村へ伝えられ、ペリー来航十日後に村から四頭の馬で武具・甲冑が藤沢屋敷に上納されている。それを受けて藤沢氏の用人佐々周輔から兵助に宛てた二月二日付けの書状で、ペリーの再来に伴い上川尻村より弓持ちを四名割り当てている。また下川尻村の領主旗本建部氏（二四〇〇石）も、弓一張 鉄砲一挺 槍三本 立弓一人 鉄砲一人 槍持ち四人 甲冑持ち二人 長刀一人 草履取り一人 挟み箱一人 馬口取り一人 小荷駄馬二人 留具持ち一人 押さえ足軽一人 みの笠持ち一人を割り当て、知行地七村より請け書が提出されている。また下川尻村（城山町）の領主建部氏のように、黒船来航に際し、出陣した村人が万一戦死したなら、その子孫には苗字帯刀を許す旨の申し渡しが出されていることもある。このように黒船来航は、旗本の知行所

の村々にとって、有事の際の負担まで出てきたのであるが、この負担に村々が積極的に協力しているところが見受けられる。それだけ情報が浸透していたということである。

このように黒船情報をもとに、幕末のマスコミ事情を見てきたわけであるが、同時に幕府の危機管理意識の問題もかなりクローズアップされてくるようである。繰り返しになるが、ペリーが来ることは一年前からオランダ商館長などを通してわかっていた訳だが、その間何も対策を講じてこなかった。そして実際に来航してくるとあわてて対策を練ろうとする。幕府中枢部がパニックになり、妙案解決に至らず、結果的に開国し、条約締結に陥ることになる。その間庶民に対しては適切な情報が出されないから、マスコミが情報を流し、庶民はそれを見て状況把握していた。それにしても、当時のマスコミの対応は早く、正確性は兎も角も、その報道の早さはかなりのものであった。

ところで多摩や津久井に伝わった情報により、各村々に黒船に対する江戸防衛意識が芽生えてきている。それは献金や軍役に関わる人足割り当てなどへの積極的な関わりなどから伺える。この時期多摩・津久井では天然理心流など、武芸を習い始める村民が増えてくる。そしてこの地から後に新選組や、自由民権運動が生まれるのである。

幕末、黒船情報を伝えたマスメディアは多摩・津久井の人々の生活を徐々に変えていったのである。

〈参考文献〉

- 『神奈川県史 資料編10 近世(7)』 県史編集室 昭和五三年
『神奈川県史 通史編3 近世(2)』 県史編集室 昭和五三年
『城山町史2 資料編 近世』 城山町史編集室 平成二年
『城山町史6 通史編 近世』 城山町史編集室 平成九年
『町田市史 下』町田市史編纂委員会 一九八四
拙稿「町史の窓74 速報 幕末黒船情報―城山町と西洋文化の出会い―」『広報 ぷりにーず』 城山町 平成四年
『幕末・維新の相模原―村の殿様 旗本藤沢次謙と村人たち―』 相模原市立博物館 平成一二年
『NHK 歴史への招待 15』 日本放送出版協会 昭和五六年
神崎彰利・大貫英明ほか『神奈川県史』 県史14 山川出版社 一九九六
岩下哲典「予告された黒船来航」『幕末大全上巻』 歴史群像シリーズ73 二〇〇四

〈参考史料〉

- 佐久間長敬『嘉永日記抄』一四冊(日比谷図書館蔵)
越前藩医坪井信良の書簡
(<http://homepage1.nifty.com/jshoda/essays/essays41.htm>)

より引用

「続々泰平年表」『東京市史稿 港湾篇第2』

東京都公文書館 大正一五年